

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

地域性からの逃走 : Aysel Özakin 『青い仮面』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 濱崎, 桂子, Hamasaki, Keiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/953

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



地域性からの逃走—— Aysel Özakin 『青い仮面』

浜 崎 桂 子

序

Aysel Özakin (1942-) は、外国人、あるいは異文化出身者によるドイツ語文学についての議論において必ず言及される女性作家のひとりである⁽¹⁾。しかし、ドイツ語で出版されている彼女の作品のうち、初めからドイツ語で書かれた作品はそれほど多くはなく⁽²⁾、ほとんどの作品は、トルコ語からの翻訳で出版されている。それでもなお、彼女の作品は、「トルコ文学の翻訳」としてではなく——おそらく作者自身の希望に反して——ドイツの「外国人問題」、あるいは「多文化状況」を描いたドイツ語文学として受容されているようである。

Özakin は、ベルリンに移住する以前から、トルコで作家として活動をしており、いくつかの文学賞も受賞している⁽³⁾。トルコ、アナトリアの地方都市に生まれた彼女は、アンカラの教育大学でフランス文学を専攻し、首都イスタンブールでフランス語の教師をつとめていた。1980年12月、作家会議の招待を受けて、当時の西ベルリンを訪問した Özakin は、とっさにそのまま、ベルリンに残ることを決心したという。その3ヶ月前、1980年9月、トルコ

(1) Chiellino, Carmine: *Am Ufer der Fremde Literatur und Arbeitsmigration 1870-1991*. Stuttgart; Weimar (Metzler) 1995.

(2) これまでに、ドイツ語で執筆・出版されたのは、『あなたは歓迎されている』(1985)『しなやかに彼女はたちあがった、飛翔するまで』(1986)の二編の詩集である。

(3) 『空とお絨毯——父の足跡を追う』(1975 ドイツ語訳 1987), 『授賞式』(1979 ドイツ語訳 1982), 『額のうへの鳥たち』(1979 ドイツ語訳 1991)などは、トルコで発表された作品である。

では軍事クーデターによって軍部が政権を掌握。イスタンブールでも、多くの知識人、学生が、思想犯として逮捕され、「男女が手をつないで歩くことも考えられない」⁽⁴⁾抑圧的な雰囲気⁽⁴⁾に支配されていた。ただし、Özakin自身は、このベルリンへの移住が「亡命」だったとは説明していない。自身の兄弟の逮捕の知らせを受けた彼女は、「とっさに（トルコで起こっている）迫害や拷問について、ドイツのジャーナリストたちに報告した」⁽⁵⁾ことはあるが、帰国する可能性を排除する「亡命」を申請することはしなかったという。

この、Özakinがベルリン滞在を決めた1981年ごろは、ドイツにおいて、「外国人」特に「外国人労働者」によるドイツ語による文学作品への関心が生まれ始めた時期であった。⁽⁶⁾のちの「シャミッソー文学賞」の先駆けとなった外国人のための文学賞が、ミュンヘン大学の「外国語としてのドイツ語研究所」によって1979年より開催され、その受賞作がアンソロジーとして出版された。⁽⁷⁾一方、1980年には、イタリア出身のFranco Biondi (1947-)、シリア出身のRafik Schami (1946-)が中心となった、外国人作家、芸術家のグループ“PoLiKunst”が、外国人労働者のおかれた状況を、文学作品や芸術によって表現するという宣言のもと、最初の作品集『工場と駅の間で』⁽⁸⁾を出版していた。また、ブレーメンの出版社から、『異国の中の我が家

(4) Özakin, Aysel: Die blaue Maske. ins Deutsch übersetzt von Carl Koß. Frankfurt am Main (Luchterhand) 1989. S.89.

以下、このテキストからの引用は、本文中に (BM.S.89) のようにページ数のみを示す。

(5) Blatter, Marie-Luise: Abenteuerin, Kosmopolitin. Ein Porträt der Schriftstellerin Aysel Özakin. in: Basler Zeitung.

(6) 1980年から1985年ころまでの、ドイツの「外国人文学」をめぐる状況については、次の拙論を参照されたい。

浜崎桂子：非母語者によるドイツ語文学——シャミッソー文学賞の草創期——

平成7～9年度 文部省科学研究費補助金研究成果報告書「ドイツにおける多文化社会と異文化干渉」研究代表者 村田経和 69～87頁。

(7) Ackermann, Irmgard (Hg.): Als Fremder in Deutschland Berichte, Erzählungen, Gedichte von Ausländern. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1982.

Ackermann, Irmgard (Hg.): In zwei Sprachen leben Berichte, Erzählungen, Gedichte von Ausländern. München (DTV) 1983. など

(8) Biondi, Franco; Schami, Rafik u.a. (Hg.): Zwischen Fabrik und Bahnhof. Bremen (con) 1981.

にて一ドイツ連邦の外国人読本⁹⁾』という、80人を越える外国人作家及びドイツ人作家の「外国人問題」をめぐる作品のアンソロジーも出されるなど、どれも小さな試みではあるが、「外国人による文学」がにわかに注目を集めた時期だったのである。

Özakinが、ドイツに移住した当初に書いた作品からは、あきらかに、このドイツの読者の間に形成されていた「外国人作家」への期待に影響されていることが読み取れる。ドイツで最初に出版した短編集『ここで、歳をとることになるのか?』(1982)は、ベルリンに暮らすトルコ人、特に女性たちや子供たちの苦難と悲嘆の物語がつづられた。次の作品『他人の情熱』(1983)では、朗読会のための旅行をするトルコ人女性作家を主人公とし、おそらく彼女自身が、各地の朗読会でのドイツ人読者との議論の中で遭遇したであろう、さまざまな葛藤をとりあげている。Heidi Röschが指摘しているように、次に出版された短編集『意識の微笑み』(1985)で、Özakinはその作品のテーマを一転させた。この短編集でも、ドイツとトルコ、ヨーロッパとアジアを行き来する女性たちが主人公ではあるが、もはや、移民問題が前景では扱われない。むしろ、トルコであれ、ヨーロッパであれ、男性たちとの関係の中で「男性性」にぶつかりながら、自分たちの生き方を考察する女性たちを描いている。Chiellinoが指摘しているように、Özakin自身、当時、「ドイツ人の目的にかなった、視野の狭い期待」にさらされていることを自覚していた⁽¹⁰⁾。そこで、彼女は、「トルコ人の母親たち、ベルリンのクロイツベルクで、流れ作業の仕事をする女性たちのイメージ」とは違う女性たちを描くことで、トルコに対する先入観を破ろうと試みたのである。彼女が作品で問題にしようとしたのは、「都市出身の女性と、アナトリアの田舎の

(9) Schaffernicht, Christian (Hg.): Zu Hause in der Fremde. Ein bundesdeutsches Ausländer-Lesebuch. Bremen (Verlag Atelier im Bauernhaus) 1981.

(10) Rösch, Heidi: Migrationsliteratur im interkulturellen Kontext. Eine didaktische Studie zur Literatur von Aras Ören, Aysel Özakin, Franco Biondi und Rafik Schami. Frankfurt am Main 1992, S. 110.

(11) Chiellino, Carmine: Am Ufer der Fremde. S.414.

男たち」の間にある、生活スタイルや意識の違いであった。

のちに Özakin は、インタビューに答えて、80年代初頭の彼女の作品が「外国人文学」として扱われていたことを回想し、それが、彼女の著作活動を限定してしまっていたと述べている。⁽¹²⁾ また、「外国人文学」という概念については、1987、88年冬学期に「異文化交流における文学」というタイトルのもと行われたワークショップにおいて、次のように辛辣に、抵抗する立場を表明している。

この外国人文学という概念のもとに、質の悪い文学が生産されていることは確かです。この文学は、あまりに社会的な強制やアクチュアルな出来事に絡み合っているからです。(……)

この概念には、いつも、少し見下す視線を感じます。これは本当の文学ではないけれど、まあ、読むこともできる、とでも言うかのように。ある良い文学作品があるとすれば、それは外国人文学にはならないでしょう。外国人文学とは、つまり、否定的なものと考えられているのです。個別に見ずに、あまりにおおざっぱに見る傾向が見られます。しかし、個別性なしには、いい文学など生まれないのです。⁽¹³⁾

当時、いわゆる「外国人作家」とされた人々のなかで、Özakin だけがこのような発言をしていたわけではない。しかし、すでにトルコで創作活動をはじめていた彼女にとって、ドイツに移住することで突然与えられた「外国人文学」というレッテルが、いかに窮屈なものであったかは想像にかたくない。ちょうどこのころ、Özakin は北ドイツ Worpsswede の芸術家村に生活し、小説『青い仮面』を執筆していた。Rösch の紹介によれば、Özakin はまずこの作品をドイツ語で書き始め、のちにトルコ語に「乗り換えた」のだとい

(12) Blatter, Marie-Luise: Abenteuerin, Kosmopolitin. Ein Porträt der Schriftstellerin Aysel Özakin.

(13) Rösch, Heidi (Ed.): Literatur im interkulturellen Kontext. Dokumentation eines Werkstattgesprächs und Beiträge zur Migrantenliteratur. Technische Universität Berlin Dokumentation. Weiterbildung H.20 Berlin 1989, S.65f.

⁽¹⁴⁾ 次の発言は、Özakinにとって、「在ドイツのトルコ人作家」というレッテルから自由になることがたやすくはなかったことを裏付けている。

私はドイツ語はほとんど忘れてしまいました。今、ドイツ語とは、もう取り組んでいないからです。(……) 今、私は、執筆中は、自分がドイツにいることを忘れるように努めています。絶えず、ドイツの中で文学を書いているという意識で書いていると、社会的にも、政治的にもあまりに束縛されてしまい、わたしの文学的な独自性が失われてしまうのです。

今、そういった危機を感じていて、はやくこの時期がすぎればいいと思っています。現在は、この言葉から距離をとって、トルコ語だけで書いています。⁽¹⁵⁾

ここでÖzakinは、ドイツ語で書くこと、言い換えれば、ドイツの読者に宛てて作品を書くことを、はっきりと拒絶している。それでは、この最初はドイツ語で書き始められたという『青い仮面』という作品は、「トルコ語の文学」として読まれようとしているのだろうか。ドイツにおけるトルコ人というレッテルを引き剥がそうとした作家は、この作品で、どのように自分の出自を扱おうとしているのだろうか。もう少し、Özakinの87、88年当時の発言を考察してみたい。同じワークショップでÖzakinは、「外国人文学」という作品のコンテクストを限定するジャンルにかえて、「世界文学」という概念を提示している。

私は、文学の発展に関心を持っています。そして、ある種の世界文学というものに、望みを託すことができないかと考えています。(……) 私が、世界文学というとき、出身地や、地域性というものを無視したり、消滅させなければならないと考えているのではありません。地域性というのは、いつも文学の中に存在します。むしろ、地域性が見えるということは、重要な前提といえます。しかし、私が強調しているのは、地域性です。ナショナリティではありません。(……)

世界文学というのは、人類に向かって話かけることが出来たときに、初めて成立

(14) Rösch, Heidi: Migrationsliteratur im interkulturellen Kontext. S.132.

(15) Rösch, Heidi: Literatur im interkulturellen Kontext. S.65.

します。たとえば、死について書きながら、地域性を守ることもできます。また、それを乗り越えることもできます。この地点に、私は到達したいのです。地域性をもって、地域性を乗り越えること⁽¹⁶⁾です。

「地域性をもって、地域性を乗り越えること」、というこの発言から明らかなのは、作品の言語をトルコ語へと戻したことが、決して「トルコ」というナショナリティへの回帰ではないということである。母語に戻る試みというよりは、「トルコ人のドイツ語」——最も多くの労働移民をドイツに送った国からやってきた人々の言葉——というコノテーションを抜け出す試みであったといえるだろう。しかし、一方で、彼女の出身地、あるいは「地域性」——それは、必ずしも「トルコ」という単位で呼びうるものではない——は、彼女の文学の重要な前提として位置づけられているようである。それでは、彼女が、まさにこの問題を意識した時期に執筆したと思われる、『青い仮面』では、この「地域性」はどう描かれるのだろうか。

1. 回想する「私」の物語

この小説の語り手「私」は、Özakin自身を思わせるベルリンに住むトルコ人女性作家である。チューリッヒでの朗読会を終えた場面から始まるこの物語は、一貫してこの「私」の視点から語られる。朗読会を終えた「私」に話しかけてきたスイス人の男性は、やはりトルコ出身の女性作家であり、先ごろ若くして逝った「私」の友人 Dina の夫であったという。Dina について話したいというこの男性と会う約束をし、チューリッヒ駅のビストロで彼を待ちながら、「私」は Dina と知り合った20年前に思いを馳せる。トルコの地方都市で教師をし、夫と堅実な生活を送っていた「私」は書きたいという希望を捨てきれず、イスタンブールの知人の作家に会いに行き、そこで、Dina と知り合ったので⁽¹⁷⁾あった。

(16) Rösch, Heidi: Literatur im interkulturellen Kontext. S.67.

(17) Röschによれば、この作品もまた、他のÖzakinの作品のように自伝的な色彩が濃く、こ

行き違いからこの日 Dina の夫と会うことが出来なかった「私」は、必ず彼を見つけ出し、Dina について話さなければならないという義務感を感じ、チューリッヒに滞在することを決め、早速、部屋を借りる。物語を構成する「私」の視点は、チューリッヒの街を一人彷徨する「現在」においては、都市に住むさまざまな人々を観察するが、しばしば、この現在のコンテクストから「過去」へと飛躍し、Dina と「私」、それぞれがこれまで歩んできた道筋を明らかにしようとする。

この Dina と「私」の人生に共通するのは、二人がたえず「移動」を続けているという点である。20年前、初めて首都イスタンブールを訪ね、作家や学生たちとの文学談義をすることで大きな刺激を受けた「私」は、「違う人間になりたい。別の人生を始めたい」(BM.S.18) と感じる。そこで出会った Dina は、「フランスの映画から出てきた」(BM.S.18) ように、まぶしい存在の女性として登場する。既に作家として活躍し、幅広い交友関係を持ち、また、すでにヨーロッパの都市を経験している Dina は、初対面の時から「私」にとっての憧れの像となるのだ。その Dina は、地方出身の「私」の詩作の才能を認め、首都イスタンブールへ出てくることをすすめる。

この出会いのあと、「私」は、Dina との出会いによって喚起された「別の人生」を実現すべく、夫との安定した生活に終止符を打ち、地方都市を抜け出す。教師としての生活を始めたアンカラでは、「解放された女性」のイメージを強迫観念のようにかかえながら、妻子ある男性との関係を続けていく⁽¹⁸⁾。そして、次第に、作品を新聞に発表するようになるのである。徐々に、軍部による思想統制が厳しくなっていく中、「私」はアンカラを去り、ベルリンへと移動し、そこでも作品を出版するようになる。ただ、この作家になっていく過程については、この小説の中では多くは語られない。むしろ、「私」

↓の Dina という人物もトルコの女性作家 Kiral Tezer に取材しているという。

Rösch, Heidi: Migrationsliteratur im interkulturellen Kontext. S.138.

(18) Röschによって引用されている Multu の分析によれば、この語り手「私」の妻子ある男との関係について書かれた章は、トルコ語版にはない。vgl. Rösch: Migrationsliteratur im interkulturellen Kontext. S.133f.

の回想は、自身の移動の軌跡をたどること、またその道筋が Dina のそれと交差する地点をめぐるって続けられていく。

アンカラで、またベルリンで、「私」は、やはり移動し続けている Dina に偶然出会うことになる。「私」は、かつて、自分の人生に決定的な影響を与えた彼女との再会を喜び、自分の生活が、あの田舎の教師だったときとは、大きく変化したことを報告しようとする。しかし、その偶然の邂逅は、旧交を温めあうものとはならず、そっけないもので終わってしまう。のちに、Dina が、ガンで死亡したこと、その数日前まで精神科の病棟にいたという知らせを受けてから、「私」にとっての Dina のイメージは変化を始める。かつて、自信に満ち、魅力にあふれていると思われた Dina の真の姿を明らかにするべく、「私」は、Dina の人生についてのメモを取りながら、チューリッヒの街をさまようのである。

これまでの、この『青い仮面』の分析では、この Dina と「私」の関係に注目するものが少なくない。たとえば、Henckmann⁽¹⁹⁾ は、Dina を語り手の「私」のドッペルゲンガー＝分身ととらえ、Dina の生を再構築しようとする「私」の試みは、「私」が自己を再確認する過程であると解釈している。Dina は、「もう一人の私」、それも理想の姿として、「私」の回想の中で形象化される。すなわち、Dina とは、ヨーロッパ志向の教育を受けた「解放された女性」であり、また、自分の感情に正直に、男性とも奔放にふるまうことの出来る自由な人物として描かれるのだ。「Dina のように行動しよう。(……) 他人がどう思うかを気にせずに。自分の望みと、好奇心に従って。」(BM.S.106) とあるように、「私」は、Dina に反映された理想の姿を自分の中に取り込もうとしているようである。小説のクライマックスで、「私」は、青い仮面をつけ、カーニバルの踊りの列に加わり、つかの間自分を解放して、

(19) Hickmann, Gisela: "Wo Maske und unterdrücktes Ich eins werden" Zum Motiv der Doppelgängerin in Aysel Özakins Die blaue Maske. in: Howard Mary (Hg.): Interkulturelle Konfigurationen. Zur deutschsprachigen Erzählliteratur von Autoren nichtdeutscher Herkunft. München (iudicium) 1997. S.47-62.

Dina に変身する。この青い仮面という小道具が小説のタイトルとなっていることから、Dina を「私」の分身ととらえる解釈は、この小説のひとつの中心的なテーマへのアプローチとなっているということができよう。

また、Rösch が試みているように、この語り手の「私」と Dina が、ベルリンやチューリッヒで抱えた問題を、異文化間を移動する人々の問題としてとらえる視点も当然のことながら重要である。⁽²⁰⁾ Rösch はこの小説を、トルコの知識人女性が、彼女にとって異質なもの——すなわち、アナトリアの山間部からヨーロッパに移り住む労働移民たち——を、理解していく過程であると解釈する。語り手の「私」が、掃除夫である外国人労働者に挨拶をするという小説の最後の場面を、Rösch は、ヨーロッパを志向してきた知識人女性が、自らのヨーロッパ中心主義を脱却し、異なるものを受け入れるようになった場面であると分析している。異文化間コミュニケーション教育の教材として外国人文学に注目している Rösch のこの結論は、この作品の持つある意義を言い当てようとしているようである。しかし、異文化出身の作家の作品の有用性を問うこのような視点こそ、まさに Özakin が抵抗しようとした、「社会的な強制」にあまりに影響された解釈に陥ってしまう危険をはらんでいることは否定できない。

ここでは、上で確認した Özakin 自身の発言をふまえ、この作品が「地域性をもって地域性を越える試み」として成功しているかどうかという視点で、あらためて分析してみることにはしたい。

2. 移動する人々

先にみたように、語り手の「私」は、首都イスタンブールを訪ねたときに、初めて Dina と出会うことになる。これが、この「私」の移動の始まりだ。移動したいという熱望は、「私」や Dina だけのものではなく、1960年頃、

(20) Rösch, Heidi: Aysel Özakin's Literatur als selbstkritische Auseinandersetzung mit Eurozentrismus. in: Rösch, Heidi: Migrationsliteratur im interkulturellen Kontext. S.109-147.

トルコの都市に住む知識人青年たちに共通のものであったことを「私」は思い返す。その目的地は、パリ、ロンドン、ベルリンといったヨーロッパの都会でなければならない。ヨーロッパに留学し、その文化の中に身を置くことは、彼らの共通の目標でもあったのだ (BM.S.18)。たとえば、Dina の両親がそうであったようなケマル主義の信奉者たちは、「文明以前」とみなされた伝統——すなわち、あらゆるイスラム教的なものや、オスマン帝国の文化——からの脱出をめざし、近代文明たるヨーロッパを志向していた⁽²¹⁾。その両親のもと、Dina は、祖母がとなえるイスラムの祈りから遠ざけられ、ドイツ系カトリックの女子校でドイツ語で学校教育を受けたのである。「私」が出会ったころの Dina は、他の仲間たちと同じように、「イスタンブールから逃げ出し」、「ベルリンかチューリッヒへ」(BM.S.21) 行きたいと話す。

一方、「伝統と宗教にとらわれた周縁の地」(BM.S.17) で子供時代を過ごし、地方都市の教師として安定した生活を送っていた「私」は、この Dina との出会いをきっかけに、移動の決心をし、アンカラ——イスタンブール——ベルリンと、都市から都市へと移り住む。そして、この小説の冒頭でもまた、まるで生活しているベルリンになんのつながりもないかのように、あっさりとチューリッヒへと移動するのである。

まず、この新しい移動先、チューリッヒが「私」の目にどう映っているのかを見てみよう。「私」が Dina の夫を待っていたチューリッヒ駅のビストロに座る客は、ほとんどが外国人で、周囲から聞こえてくるのは、アラビア語やイタリア語であった。駅こそ、移動する人々が行き来する場所である。その場でこの都市に残ることを決めた「私」は、トルコの青年の仲介で、街の中心、「観光客はみな必ず通る」(BM.S.26) という通りに小さな部屋を見つける。

(21) 徹底した「ヨーロッパ化」による新生トルコの設立をめざしたアタテュルクの理想のもとでの、エリート層の欧化主義については、次の論考を参照。

ケヴィン・ロビンス (松畑強訳): トルコ/ヨーロッパ, 干渉するアイデンティティ

[スチュアート・ホール, ポール・ドゥ・ゲイ (宇波彰監訳): カルチュラル・アイデンティティの諸問題 誰がアイデンティティを必要とするのか? (大村書店) 2001年] 109~150頁。

夜になると、窓からは、ジャズやロック、スペイン語の歌や、インディアン音楽、原始の森の太鼓の音が流れ出す。この通りには、(……)トルコの民謡や、ピザ、カレー、ケバブの匂いが充満している。ありとあらゆる色の光があって、遊び場のようにも見える。そこは、子供が、一人ぼっちになることや静寂から逃げてくる場所だ。私たちの通りは、まるで、地中海の沿岸からチューリッヒまで直通の列車があって、そこから人を引き寄せているみたいだ。地中海に出かけよう、チューリッヒのほかの通りに住んでいる人たちは、この通りに食事をしに来るとき、そんなふうにするのかもしれない。(BM.S.33)

「私」がたどりついたのは、チューリッヒの中の「地中海」。観光客だけでなく、さまざまな文化圏の出身者が働き、生活をする場所である。彼女のアパートに住む人々もまた、それぞれの事情から移動してきた人々だ。長距離トラックで逃げてきたトルコ人青年、スリランカからベルリンへ亡命し、ベルリンの難民収容施設からチューリッヒへやってた銀行員、嫉妬深い夫と離婚し逃げてきたというトルコ人の女性 Fatma。そして、アパートの1階のナイトクラブでは、東アジアや、アフリカからの女性たちがストリッパーとして働いている。つまり、みな、何かから逃亡し、あるいは何かを求め移動してきた人たちであり、この通りは、移り住んできた逃亡者たちを受け入れる避難所のような場所となっているのだ。

この都市のあちこちに、「私」は似たような場所を見出す。亡命者らしきトルコ人が通うカフェ、たえずタバコをふかしつづけるインドの女性が片隅にすわるバー。避難所を求めるのは、外国から移住してきた者たちだけではない。カフェに集まる同性愛者たち、レズビアン以外の同居人を断る共同生活をする女性たち、バス停や広場にたたずむホームレス。そしてまた、一見、安定した生活を送っているように見えるスイス人の銀行員もまた、仕事を終わるとまるで日常から逃亡するように、瞑想の集いへとやってくる。私の目に映るチューリッヒは、安住する場所を持たずに逃亡し、移動する人々が、つかの間の休息を見出す場の集合体のようなものとなっている。

「私」は、この都市チューリッヒで病死した Dina の足跡を追う。まさに都市的なものを体現している Dina を理解する際にもまた、「逃亡」という概念がひとつの鍵となる。この Dina の移動が、逃亡であったことを確信していた「私」は次のように述べる。

Dina が、ベルリンでの奨学金が切れたあとチューリッヒに住んでいることは知っていた。ベルリンで知り合ったスイス人の男がいて、チューリッヒに引っ越したのだという話だった。私は、実はこんなふうには想像した。また、彼女は、簡単に逃げてしまった。ドイツでのトルコ人のイメージ、あの、粗野で滑稽なイメージから。(……) 多分彼女は、ベルリンの中のアナトリアから逃げたのだ。

(BM.S.9)

「粗野で滑稽な」ドイツに住むトルコ人のイメージ、「労働移民の生活について書かれた新聞や小説、涙を誘う民謡とアラブ風のものだけに限定された音楽」などのベルリンのトルコ文化を、Dina は軽蔑して「トルコパン文化」(BM.S.184)と呼んでいた。しかし、イスタンブールにくらべ、解放をもたらす場所であるように見えたベルリンから逃亡したのは、Dina だけではない。ずっと後に語られるように、「私」が、この移動する人々の避難所のような街、チューリッヒへと居を移したのも、逃亡にほかならないのだ。

私は、家族から逃げ出した。仕事から、アナトリアから、宗教から、兵隊たちから、男たちから、ベルリンから。なにもかもから脱出して、そして牢獄に監禁されたのだ。誰も知らない住所の、薄暗い、小さな部屋に。(BM.S.162)

3. 地域性をめぐる両義性

トルコの都会の退屈さから、あるいは、台頭しはじめた軍部から逃げ出すために、Dina と「私」はそれぞれベルリンへとやってくる。しかし、二人は、またそれぞれにベルリンからも逃亡する。「ベルリンのアナトリア」から、「ドイツでのトルコ人のイメージから」逃げ出したという、上の引用からも明らかなおおりに、彼女たちは、ベルリンにおいても、決して「トルコ」

なるものから自由にはならなかった。彼女たちは、むしろイスタンブールでよりもベルリンで、自分たちの出自に向き合うことになるのである。異国の地において、自らの出自について別の視点から考察することになるのは、当然のことかもしれない。しかし、「私」や Dina がベルリンで遭遇した「トルコ」なるものは、また、別の様相を呈していた。ベルリンの中の「トルコ」との「私」のかかわり方は、帰属意識と嫌悪感との入り混じったアンビヴァレントなものとなる。

ドイツ語を習得しないままベルリンにきた「私」は、ベルリンでもトルコ人の多い地域クロイツベルクでアパートの一室を借り、トルコ人コミュニティの集会所にも足しげく通う。「まるで、冷たく、雲に覆われた空から、日差しの中に逃げ込んで、暖をとろうとするかのように」(BM.31) 集会所に通う「私」がそこで見出すのは、編物をしながら語らう女たち、終始ただよっている料理の匂い、そして民族楽器の音色であった。しかし、「私」はそこで、必ずしも暖かく迎え入れられるわけではない。

店で、なじみのスパイスや、ドライフルーツを買い、グリルレストランで、スパイスの効いたケバブにヨーグルトを添えたものを注文した。しかし、席に座ろうとしたときには、もう、ここでは自分はよそものだと感じた。響き渡るアラブ音楽。壁に貼られたレスラーやボクサーや踊り子たちのポスター。銀の飾りのついたサーベルに短刀。私のことを不審そうにじろじろ眺めるボーイ。(BM.S.31)

このレストランでのアラブ音楽や、サーベルにみられるように、異国にあって、その文化が単純化され誇張されることはよくあることだ。現地ではむしろ失笑を買うようなトルコのイメージが、ここでは陳腐にステレオタイプ化されて作られる。しかし、それだけが「私」がここで居心地悪く感じたことの原因ではない。一人外食をする女性に対する冷たい視線は、彼女が、たとえば家族を単位とするコミュニティの中に属していないことを、非難しているようである。

私はいつも、(同じアパートに住む)女性たちと会うときには、微笑んで挨拶をした。しかし、私がトルコ語で話しかけても、彼女たちは、距離をおいて、私のことをじろじろと眺めた。まるで、わたしがドイツ人であるかのように。入り口のところで若い男に会ったが、彼は、怒りに満ちた目で私を見た。ある朝、ドアを開けると、私の前に骨がおいてあった。人間の頭蓋骨がふたつ。

(BM.S.161)

「私」は、このような、近隣のトルコ人からの仕打ちについて、感情を排して淡々と語る。「私」が彼らに受け入れられない、その理由を特に分析もしていない。むしろ、「私」が、周囲のトルコからの移民にむける視線は、彼らの視線に呼応するように、ある意味では冷淡な無関心さを持っている。たとえば、彼女が「微笑んで挨拶」をする同じアパートの女性たちについては、次のように描写される。

トルコの女性たちは、ゆったりとした花柄のワンピースを着て、白いスカーフをして中庭のベンチにすわり、大声で浮かれておしゃべりをした。編物をしたり、刺繍をしたり、そしてときどき、周りでさわぐ子供たちを叱りながら。

(BM.S.161)

この情景を、「私」は仕事をしながら、窓から見下ろして描写している。一見ごく普通の、中庭でのある午後の光景だが、ここで描かれているイメージ——ゆったりとした服、スカーフ、大声で遊ぶ子供たち——は、上のレストランの描写とおなじく、ステレオタイプ化されたドイツに住むトルコ人たちのイメージだ。このときの「私」の服装については特に言及されていないが、⁽²²⁾「私」とは異なる服装だからこそ、語り手はあえてこの近所の女たちの服装を描写したのだろう。「クロイツベルクに来ると、自分がまるで、うら

(22) 「私」の服装については、彼女が、教師をしていた時代について描写がある。「カフスボタンとカラーのついた、青いポップリンのワンピース」(BM.S.13)、あるいは「ヒールの太い黒い靴」と「スーツ」そして、仕事の道具の入った「革のかばん」(BM.S.108)とある。そして、初めてイスタンブールで「黒のぴったりしたミニスカートと、黒のシルクのブラウスを着た」Dinaに出会ったとき、このかばんが流行遅れであると感じ、自分が「ロシア映画の女の子」のように、野暮ったいと感じるのだ(BM.S.17)。

ぶれたアナトリアの小さな町に追放された、イスタンブールのインテリのような気がした。」(BM.112)とあるように、「私」は、自分も一方ではそこに「暖」を求めながら、自分と、他の在ベルリンのトルコ人との間に、明らかに一線をひいている。ベルリンでの生活が回想される中で、トルコ人を観察する描写が多く見られるのとは対照的に、近隣の人びとを含めたトルコ人たちと「私」との具体的な対話のシーンは、一度も描かれない。トルコからの——そして、多くは、山間部アナトリアの農村からの——移民労働者とその家族は、「私」にとっては観察する対象にとどまっている⁽²³⁾。この視点は、ヨーロッパにおいて、「オリエント」が対話の相手ではなく観察と表象の対象にすぎないのと、非常によく似ているのである。

この、自分とは異なるものとしての移民労働者の描写は、たびたび繰り返される。ヌーディズムの若者が日光浴をするベルリンの公園で、寝そべる女性たちを盗み見るように眺めているトルコの男——それも、祈りのためのペンダントを手にしてしている——を見た「私」は、その違和感を次のように説明している。

彼を見ていてはっきりしたのは、私と同じ言葉を話すこの男のほうが、私がまだ理解できない言葉を話すドイツ人の若者よりも、私にとってずっと異質なものだということだ。それにもかかわらず、私は恥ずかしいと思った。彼が、あまりに粗野で遅れていたから。まるで、私にもその罪があるかのように。私は、彼に対しての義務を果たさなかったのだ。文明化した人間たちのいる異国の地でどのように行動するべきか、彼に教えてやらなかったのだ。(BM.S.31)

「あまりに粗野で遅れている」この男の描写は、「私」の「トルコ」に対する相反する感情を示しているといえるだろう。作家として自由な著作活動を

(23) 「私」は Dina との対比で、自分は「黒縁の小さな町」にいたことを繰り返し強調するが、教師をしていたのは、「ブルガリア国境近くの小さな町」(BM.S.12)、すなわち、トラキア(ヨーロッパ側)にある町であったこと、そして決して農村ではなかったことは、注意しておいてもいいだろう。すなわち、アナトリアは、「私」にとって、国境を接していたヨーロッパよりもむしろ遠い場所なのである。

するためにベルリンにやってきた「私」と、この鳥打帽をかぶった（これもまた、この作品のなかでも繰り返されるトルコ人の男のステレオタイプだ）男との間に、共通点はないと「私」は理解しており、むしろ嫌悪している。しかし、一方で、同じ「トルコ」に属するものとしての居心地の悪い共同体意識が、「私」に恥を感じさせる。この「遅れた男」は、ヨーロッパの尺度での文明化を果たしていない「トルコ」として「私」の眼前に現れる。そして、同じ「トルコ」というナショナリティを持つ「私」は、そこにある種の責任さえ感じるのである。この「トルコ」から、全く自由になることはありえないかのようである。しかし、トルコ人の居住区で出身地の生活を守っている移民たちと、Dinaと「私」とは次のように区別される。

ウーラント通りで、スカーフをした三人の女が私の前を歩いていた。ビニールの袋を持って、イスタンブールの金持ちの家に通う掃除女たちのように。彼女たちは、ベルリンではなくて、アナトリアの小さな町を歩いているかのようには、大声で話していた。本当にベルリンにいるのは、Dinaと私だけだ。私たちは、ベルリンで自分たちを正当化しなくてはならなかった。（BM.S.82）

ヨーロッパ語を話し（「私」はフランス語の教師であったし、Dinaは教育をドイツ学校で受けている）作家として活動する二人は、そもそもヨーロッパの都市の文化の中で生活するためにベルリンにやってきたのであり、「本当にベルリンに」いる。しかし、「私たちは、自分たちを正当化しなければならなかった」とあるのはどんな意味なのだろうか。

これはちょうど、「私」の作品がドイツ語で発表された時期のエピソードである。この直前の場面で、久しぶりに出会ったDinaは、その「私」をほとんど無視する態度をとるのだが、後に「私」は、これがDinaの「私」のドイツでの成功への嫉妬だったと聞かされる。「自分を正当化」するとは、ここでは、ベルリン、あるいはヨーロッパで、トルコ出身の作家が作品を書く際の問題なのだ。それは、また「私」以上にDinaがかかえていた問題で

もあった。夫によれば、Dina は次のように語っていたという。

西側では、文学までもが、人種差別をする。労働移民の苦しみや、トルコの女性たちの惨めな状況について書いていない文学は、だれもまじめに受け入れようとしようとしない。(BM.S.181)

Dina の作品は、イスタンブールの都会的な場所を舞台とし、都市に集まる人々の、欺瞞や皮肉に満ちた会話や、ボヘミアン的な雰囲気を描くものであった。それは、たとえば地方都市にいた「私」が驚嘆をもって読んだものでもあったのだ。しかし、たとえば、ベルリン女性週間の一貫として行われた Dina の講演について、開催者の（おそらくドイツ人の）一人は、「彼女は、カフカなんかについて話をしたのよ。女性問題など、彼女にとって関係がないのね。私たちがっかりさせられたわ。」(BM.S.183) と述べるのだ。つまり Dina の作品は、ヨーロッパ読者が、「トルコ人女性作家」から期待するイメージには沿わなかったのである。一方の「私」は、「ヨーロッパの市場が、第三世界出身の芸術家から期待しているのは、フォークロアか、感情的でドキュメンタリーのようなもの」(BM.S.183) であることに、結果としては適応する作品を発表していた。「社会的な問題を真剣に受けとめたから」と「私」は言う。

ある場所への結びつきが、私の作品にはリアリスティックな作風をもたらしたのに対して、彼女 (Dina) は、叙情的なメランコリーへと進んでいった。(……) 彼女が、私に挨拶もせず、怒りをあらわにしたとき、多分、彼女は、地域的な要素を脱却してしまったことを、後悔していたのだろう。(BM.S.182)

ここで、「私」と Dina の作品を分けるのは、「場所への結びつき」つまり「地域性」だ。大都会の雰囲気を描いた Dina とは違い、「私」がテーマとしているのは、彼女の育った都市の周縁の地域であった。彼女の作品は、都市の人々——つまり、放浪し「移動」する人々——が持っていない、ある場所への「結びつき」を持っているのである。しかし、この二人の作風の違いに、ある価値判断を付与したのは、「トルコ」という異文化に、ある一定のイメー

ジを期待する「ヨーロッパの市場」であった。ヨーロッパのコンテクストの中では、Dina の作品も「トルコパン文化」の一つとしてしか受け入れられないということ、いや、むしろ、「トルコパン文化」に加わろうとしないトルコ人などには、関心がはられないこと、このことから、Dina は逃げ出したのである。

この問題は、先に見たように、作者 Özakin 自身が、ドイツで作品を発表するときに抱えていた「外国人文学」というカテゴリーへの違和感を想起させる。Özakin 自身の姿と考えられる語り手の「私」は、その「地域性」に結びついた作品を書いていたために、うまくドイツの読者たちの期待に適合し受け入れられていた。しかし、それは、読者の受容と書き手の意図とが実際に合致していたことを意味しているわけではない。むしろ、「私」自身は、上で見たように、自分がトルコ人のコミュニティでは、よそ者であることを痛感させられており、決して、彼女自身が描く「地域性」に同一化しているわけではないのである。夫との生活から脱出することで移動を始めた「私」にとって、その「地域性」は、もはや到達不可能なものとして描かれる。

ツイッターが即興曲を弾く間、私は目をとじた。突然、涙が流れた。その曲は、あたたかなコートのように私を包んだ。ホームシックだけで泣いたのではない。むしろ、自分がここでよそ者だからこそ、泣けてきたのだと気がついた。このメロディーや、人の集まりは、私の記憶や感覚を呼び覚ましたが、私は、時間の壁で、そこから切り離されていた。そういうものは、子供時代に置き去りにしてきてしまったのだ。

(BM.S.186)

ある土地への結びつき、出身地の文化がもたらすものは、「私」にとっては、単なる束縛ではなく、暖かさでもある。子供時代に体験した暖かさはしかし、「時間の壁」の向こう側、手の届かない所にしか存在しない。ベルリンのトルコ人コミュニティにおいて暖かさを得られないことを自覚した「私」は、そのベルリンを、いとも簡単に離れることができたのである。

チューリッヒでの「私」は、この都会に生活する移動する人々を観察し続

けている。そこで「私」が出会うのは、ベルリンのクロイツベルクに見られたような、エスニシティのコミュニティにではなく、バーのカウンターや、カフェに、それぞれ一人二人でやってくる、移動する人々の姿であった。しかし、このチューリッヒでの「私」の生活もまた、いくつかの「トルコ」の要素に取り囲まれている。「私」に部屋を仲介してくれたのもトルコの青年であったし、同じアパートには、トルコ人の夫のもとから逃亡してきた Fatma という女性が入居する。この Fatma は、「私」にとってのもうひとつの「トルコ」の地域性を体現する人物として描かれているといえよう。この Fatma と「私」がどう関わるかを見ることで、「私」のトルコの「地域性」とのかかわりをさらに見てみたい。

Fatma は、自分の部屋に「私」を招き入れ、トルコのクッキーとお茶でもてなし、自分が単身チューリッヒにやってきた事情についての打ち明け話を始める。

クッキーが、私の舌の上で溶けていく間、チューリッヒでのこの一週間、私の上空にたちこめていた孤独の雲も、一緒に飛んで行った。窓の外隣の建物の壁に目をやった。その壁は、冷たく灰色だったが、それでも、太陽の照る屋外にいるように、私の中に暖かさの感覚が広がった。私は、沸めのお茶の香りを吸い込み、お礼を言うように Fatma に微笑みかけ、ぐらぐらする木の椅子によりかかった。

(BM.S.86)

「私」がベルリンのトルコ人コミュニティの中では見いだすことのできなかった暖かさが、ここでは「私」の体を満たしている。ここで、トルコのクッキーが「私」の中に呼び覚ましたものとは、近しい女性同士が過ごす私的な時間の記憶である。その、私的な空間で Fatma は、自分がなぜ夫のもとを逃げ出してきたか、彼女自身が夫以外の男性とどんな関係を持っていたのかというような、個人的な打ち明け話を始める。また、あたらしい軍部による政権下のトルコで、いかに女性が生活しにくくなったかという状況についても語られる。「ほかの国では、人間が月に行っているというのに、私たちの国で

は、女性の足の間を検査する以外のことをしようとしめない」(BM.S.90)と嘆く Fatma は、もうトルコには戻らないと決心を固めるのである。「私」は、トルコの女性をめぐる状況に耳を傾けながらも、むしろ、「時間の壁」の向こう側にある、記憶の中の女性の時空に思いを馳せている。

Fatma と一緒にいると、忘れていた感覚が戻ってきた。近さという心地よい感覚だ。当時、子供のときに、近所の女性たちと一緒に、蒸し風呂に行った時のような。女性たちは、大抵太っていて、一緒に体を洗い、お互いに背中をこすり、歌い、オレンジの皮をむき、同じ浴槽にいるほかの人たちにも配ったものだ。一糸まとわぬ女性たちが、熱い蒸気の湯気の中を歩き回り、大理石の床に並んで横になり、カビみたいな匂いのするクリームを脇の下や足に塗って脱毛をしていた。そして、彼女たちは、家で起こったことをすべてそこで話していた。汗をかいた女性の歌が、ガラスの丸天井まで高く高く上がっていき、そして、滴となって、私たちのもとに落ちてきた。突然、Dina のことが思い出された。彼女は、子供の時、女性浴場に行ったことはなかったのだ。(BM.S.91f.)

この「近さという心地よい感覚」は、「トルコ」というよりは、「私」の子供時代の記憶に根付いている。近しい女性たちの間でだけ共有される、湯気につつまれた暖かな時間。クッキーの味覚とお茶の香り。これらの記憶は、言葉によってではなく五感によってよみがえってくる、身体的な感覚の記憶である。ひとりチューリップでの生活を始めた「私」にとって、この記憶から呼び出された暖かさの感覚は、つかの間、孤独と疲れをいやすのである。そして、Fatma によるトルコの政情の説明で明らかなように、この「暖かさ」は、もはや現在のトルコにもおそらく存在しないものなのだ。

しかし、「私」は、Fatma にこの癒しを与えてくれるような暖かさだけを見出しているのではない。ヨーロッパで独立して生活するために有用であるような学歴も持たず、掃除婦としてなんとか生活を立てている Fatma への「私」の視点は必ずしも同情的ではないのだ。ショウウインドウの抽象絵画に理解を示さず、ゲイたちを「倒錯している」と断じ、周囲を気にせず大声

で談笑する Fatma と一緒にカフェに来たことを、「私」は恥ずかしいと感じている。それは、ちょうど、ベルリンの公園で女性を眺めるトルコの男性に「恥」を感じたのと同じ反応である。一方で暖かさと感じられた Fatma の持つ「トルコらしさ」は、ヨーロッパの都市においては、遅れているもの、恥ずかしいものであるとされるのだ。

Fatma は、さらにナイトクラブでベリーダンスをして働くという計画を話し、「私」の子供時代のベリーダンスをめぐる記憶を呼び起こす。女性たちの集まる自宅で、「私」の母がタンバリンの音に合わせてベリーダンスを始める。近所の女性たちは、「母と娘と一緒に踊るのを見たい」(BM.S.148)と、「私」にも踊るように強要する。しかし「私」は、踊る母を恥ずかしいと感じ、周囲の女性たちの手を振り切って、家を飛び出してしまふ。

あ のとき、なぜ、通りで私は泣いたのだろう。なぜ、あの部屋から逃げ出したのだろう。粘土の壁に木の扉。木炭の火で暖まっていて、灯油ランプの灯がついていた部屋。バラの香水の香りの中、タンバリンを打つ音が響き、女性たちの胸やおなかや腰がゆれていたあの部屋から。(BM.S.148)

その夜、逃げ出した家にもどった「私」は、「踊りを強要しようとした女性たちに、復讐するかのように」同じ灯油ランプの灯のもとで、フランス語の宿題をする。「私」は、いわばフランス語の勉強を通して、そしてその後の教師としての、あるいは作家としてのキャリアを身につけることで、この女性たちの私的な空間からの脱出を果たしたのである。だからこそ、今、ヨーロッパの都市で、「私」は、Fatma と違って自活していくことができるのだ。彼女がそのとき逃げ出した部屋とは、女性たちの親密な空間であり、香水の香り、タンバリンのリズム、そして男性の視線から自由な中での女性の身体性を女性自身が楽しむ場であった。しかし、すでにそのときに、「私」は、この身体性が支配する空間に少なからぬ嫌悪感を持ち、逃亡しようとするのだ。彼女が今、懐かしく思い出すこの私的な女性たちの時間は、暖かな記憶

であると同時に、彼女が意図的に「時間の壁」の向こう側に捨ててきたものなのである。

作家としてのキャリアをもった「私」、すなわち、ヨーロッパの文明を志向してきた者にとって、ヨーロッパで出会う「トルコ」とは、いまだに文明化を果たしていない、遅れたものにとらえられ、移民労働者に代表される教育のないトルコ人に対する語り手の視線は、言わば、オリエントに対するヨーロッパのそれに近いものである。しかし一方で、自分自身の子供時代に根付く地域にまつわる記憶は、暖かさとして呼び起こされる。それはまた、女性たちの私的なコミュニティにおいてのみ成立したような心地よい近さの記憶であり、身体感覚に結びついた記憶になっている。しかし、この暖かさは、現在のトルコでも、また移民たちがベルリンで作り出す「トルコパン文化」の中でも成立しないもの、すなわち、記憶の中でのみ可能なものなのである。

結 語

前章であきらかになったように、この『青い仮面』の語り手である「私」は、トルコから逃げ出してやってきたヨーロッパの都市で、むしろトルコの「地域性」と否応なく直面しており、嫌悪感と郷愁の混在した、相反する感情を描写している。この場合の郷愁とは、トルコという「場」に対する想いというよりも、母や近所の女性たちの保護のもとにあった子供時代の記憶、その暖かさの記憶に対する憧憬である。主人公の「私」も、またその友人の Dina も、国家あるいは民族としての「トルコ」には同一化せず、たとえば、トルコ独自の文化に表象されるような「地域性」からは距離をとる。「私」が唯一結びつきを見出すことのできる共同体とは、「時間の壁」の向こう側にある、女性同士の私的な時間でしかありえない。自分が所属する「地域性」は記憶の中にしか存在しないという意味において、この「私」の語り手が、回想の物語であるのは必然であるといえるだろう。都市から都市へとの移動

を重ねてたどりついたチューリッヒで、この認識に至った「私」は、次のように語る。

私は、家族から逃げ出した。仕事から、アナトリアから、宗教から、兵隊たちから、男たちから、ベルリンから。なにもかもから脱出して、そして牢獄に監禁されたのだ。誰も知らない住所の、薄暗い、小さな部屋に。 (BM.S.162)

2章で見たような、移動する人々のための避難所のようなチューリッヒの街もまた、「私」にとっては安住の場とはなりえない。「誰も知らない住所」という言葉に象徴されるように、移動しつづける者は、継続的なコミュニティから切り離されて、一人であることを宿命づけられているのだ。逃亡の末に「監禁」された私の、この先の逃亡はもう不可能であるかのようだ。ここでは詳細な言及を避けるが、「私」の「男たち」との関係性もまた、「地域性」という共同体に対する態度と同じようなぶれを見せている。「私」は、チューリッヒでも、Dinaの夫を含め何人かの男性たちとの「結びつき」がありえるかもしれないと、つかの間の希望を抱く。しかし、やはり一つの「共同体」であるパートナーとの関係もまた、いつか幻滅へと至ることを「私」は知っ
てしまっている。

私は、独りになることを選んだ。だけど、まさにこれこそ、私がまだ愛を信じていることの証明ではないのか？私が恋することのできる人間が現れるまで、独りのままでいる。それから結びつきを得るのだ。いつだってそうだったのではないか？結びつく。そして幻滅。 (BM.S.144)

一方で、「結びつき」や「暖かさ」を強く求めながらも、その期待がいつか幻滅に変わることから身を守り、そこから逃亡する「私」が「監禁」されている状況とは、この「独りでいること」という状況だ。良い母親として、良い妻としての生活が約束されていた「家族」、教師としての役割が与えられていた「仕事」、国家を統制しようとする「兵隊」、そして、親密な結びつきを求める「男たち」。彼女が拒否してきたのは、安定を与えてくれるが、同

時に束縛でもありえるような「共同体」である。この「共同体」にことごとく背を向け、別の地に移動しつづけた彼女が最後に選び取ったもの、それは「独りでいること」であった。このことに気づいたとき、「私」は、もはや、具体的な逃亡先を見出すことはできず、「独り」でいる自分を肯定することしかできない。

どれくらい長くチューリッヒに滞在できるのかは分からない。でもベルリンに戻るつもりはない。ベッドに身をのばして、私は考えた。いろいろあるけれど自分の道を一人でやってきたのは正しかったのだ。(BM.S.140)

この決断は、「共同体」というものに違和感を持ちつづけてきた「私」の、一つの態度決定である。彼女は、「共同体」という幻想を共有することを拒否してはいるが、この、内向きで後ろ向きな「私」の選択は、「共同体」そのものを揺り動かすような積極的な力は持ち得ない。チューリッヒの街に生きる、多くの、そして多様な「移動する人々」を認め、そこに自分との類似性を見ながらも、「私」はもはや彼らとの結びつきを試みることはできず、ただ観察するだけだ。小説の最後の場面、「私」が道路掃除をする外国人労働者にかけた挨拶の言葉は、「共同体」に属することのできない移動する者としての、同志に対しての挨拶のようなものなのかもしれない。⁽²⁴⁾

最後に、もう一度、冒頭で考察した作者 Özakin の態度表明から、この『青い仮面』という作品の意義について考えてみたい。「ドイツにいることを忘れるように」努めて書かれたというこの自伝的な作品だが、むしろ非常に具体的に、あるドイツ在住のトルコ人女性作家の抱える問題を描写している。登場人物たちを、ベルリンのクロイツベルクから脱出させ、チューリッヒへ

(24) このように「地域性」あるいは「共同体」との関係性からこの作品を分析するならば、このシーンを、「私」がヨーロッパ中心主義を克服する場面だとする Rösch の解釈は、必ずしも説得力を持たない。ここで「私」は、むしろ、あらゆる「他者」との関わりを回避しているのであり、Rösch のこのような「異文化の理解」には到達していない。

vgl. Rösch, Heidi: Aysel Özakins Literatur als selbstkritische Auseinandersetzung mit Eurozentrismus. in: Rösch, Heidi: Migrationsliteratur im interkulturellen Kontext. S.109-147.

と小説の舞台を移動したことで、作者自身も、「ドイツのトルコ人像」から逃走しようとしているようである。「私」や Dina といった登場人物たちが都市の人間であることが強調されるのは、この小説の主題を、「トルコ」と「ヨーロッパ」という二項対立としてではなく、「都市」に生きる人々の普遍的な問題として描こうとした、ひとつの試みであろう。登場人物たちが、異国の都市で直面するのは、決して、「ヨーロッパという異文化」と「自文化」との葛藤でもなく、ましてや、伝統的な女性観とヨーロッパ流の女性解放との価値観の相違でもない。⁽²⁵⁾むしろ彼女たちは、ヨーロッパの都市において、「トルコ」の中の異文化に直面し、また、彼女たちに与えられている「トルコ人女性」という役割に違和感を持つのである。そのとき、「私」がぶつかるベルリンのアナトリア文化の描写は、ドイツでイメージされる典型的な「トルコ人労働者」の表象をなぞっている。ここでは、一方で「ドイツのトルコ人作家」というレッテルに抵抗している作者自身が、また、他の対象にたいして、表象する（暴）力を持つものとして、同じように対象にレッテルを貼っていると指摘することもできるだろう。このステレオタイプで描かれたトルコ人労働者たちを背景のようにして、彼らとは一線を画した「私」と Dina の物語が前景で語られているのである。

「文学までもが人種差別をする」という Dina のつぶやきは、そのまま作者 Özakin の言葉と受け取ることができる。この作品は、ヨーロッパの側から与えられるトルコの「地域性」への、非常に具体的な抵抗であるといえよう。しかし、一方で、語り手の「私」が、「トルコ」だけではなく、家族、パートナーなど、すべての「共同体」に背を向けるという決断は、この具体

(25) むしろ、この「解放された女性観」との葛藤は、「私」がすでにアンカラでの妻子ある男との関係の中で経験しているものだ。又、本論ではこの作品における、性差の問題について扱うことはできなかった。Chiellino が指摘しているように、当初同じようにヨーロッパを志向していたトルコの知識人の青年たちのうち、Dina や「私」という女性たちが、一度あとにしたトルコに戻らず移動を続けるのに対して、男性たちは、トルコに戻っていくという点はこの作品における性差の問題を考えるうえで重要である。Chiellino, Carmine: Um Ufer der Fremde. S.427.) また、同じ傾向が、トルコの男性たちだけではなく、スイスの男性たちにも見られることを指摘しておきたい。ただし、スイスの男たちが戻ろうとするのは、「地域」ではなく、パートナー関係、あるいは家庭といった結びつきである。

的な「地域性」の問題を、他の「共同体」の問題一般へと拡大する試みであると解釈できる。「地域性」の問題から、「地域性を乗り越える」問題へ、この作品は、先に引用した Özakin⁽²⁶⁾ のイメージする「世界文学」への、最初の一步だと言えるのかもしれない。

(26) この作品を発表後、作者 Özakin は、イギリスに移住し、その後の作品は英語で発表している。「ドイツよりも、イギリスの方が自由に書ける」と述べている彼女の作品は、使用言語を変えながらも、一貫してトルコ出身の人物たちを描いている。